

映画に淫する男ソクーロフ

淀川長治

『静かなる一頁』一時間十七分が、三時間五十七分くらいに私を押しつけた。苦しくはなく異様に興味あふれ画面に目が釘付けとなった。老婆殺しの男の苦しみをカメラが見て見て見つめてカメラが私をして“あきれますよ”と叫ばせるのだがその私の笑った叫び声が胸から私の口の唇にゆく手まえで消えてニンマリとする。この手はサイレントからトーキーのころの、いわゆる“芸術映画”で見せられた古い手法を今さらどうってことない。しかしこの今さらの古さが私の目をあきれさせた。この監督が『モロッコ』を作ったスタンバーグ百倍くらいの映像狂に見え画面をなめてよだれをたらし両手でさわり撫でまわしているそのいやらしさが画面を淫して、ここまで狂うと見事であった。狂うというのは狂愛のことである。いかなる映画もその監督がその自作を狂愛するとたとえ常識を失っていても許してやりたくなる。その常識を外していることで愛情が湧くことがある。ソクーロフにとってこの『静かなる一頁』は愛情がふくれあがって画面がつぶれそうになった作品と見た。老婆殺しの男が向うから歩いてきて目の前で石の上で身を伏せることぐらい誰だってわかっている。そのわかっていることをソクーロフは舌なめずりしているのか映画愛が胸をどきどきさせているのかどうか、ゆっくりとゆっくりと、その観客のすべてが知りきっている画面の目のまえの石台のところへ青年を近づけてゆく。時計を出してこのシーンを計算したくなるはずなのに時計を出すことをやめて見とれさせてしまう。この映画は、見とれさず、淫する映画。そこに打たれてしまう。

アメリカに古くは『失われた週末』というアル中映画があった。酒を求め店の前をうろつきまわる。このアル中の苦しみを小説は文字で書き、映画は目で見せる。それで映画はいつも「目」を大切にし目で話を進めてゆく。それこそが映画である。今さら申すまでもなく「目」がモノを言う。ところがソクーロフは「目」に加えてソクーロフの「心」を押しつけて、「目」を淫してどろどろにした。

少女と青年のシーン。あるいは老婆殺しがさまよって歩くのをからかうがごとき他人。なにもかもが心のなかのいらいら。スタンバーグがドストエフスキーの『罪と罰』を描いたことがあったが今はもう忘れてしまった。ところがソクーロフのこれは二十年たってもあのモノクロの古めかしい今どきおかしいくらい古いシーンが忘れられないでソクーロフを懐かしく思い出すだろう。

『マリア』これは最も愛する映画。四十分この長さにソクーロフの狂っていない映画愛を見つめた。『静かなる一頁』一時間十七分が狂っているのではなく、狂っていると思わせるほどのソクーロフ全身汗でビチャビチャ。だからその狂った熱に拍手したかったが、この『マリア』は白紙に一文字ずつはっきりとソクーロフが正直に「目」で綴方を書いてこれをアレクサンドロ・ソクーロフの本体と見た。実にすなおに美しく、息子に死なれた農婦マリアがザラザラしたドキュメント・タイプの画面でなく、美しくカラーでとらえられ、と

きにマリアの画面いっぱいのアップ（アレクサンドロ・ブーロフ撮影）がマリアの顔その皮膚を私の指にまでさわらせた。トラックが通りすぎる、列車が走る、列車の窓から外の風景を見る、すべてすべての映画で見つづけたこの田舎の道を走るシーンでひょいと見つめたら何げないものをカメラが計算して画面にくわえ車の通りすぎるその走る時間のタイムがまことに自然でこの監督がそれをすでに多くの作品からの経験で知りつくしている映画の「目」が楽しかった。けれども『マリア』はすなおに詩であった。『静かなる一頁』が汗だらけの狂音であるとする『マリア』はアヴェ・マリアのごとき古めかしさのしかも永遠に美しい詩の調べであった。

ソクーロフの名を私は初めてこの二作で知ったのだが実はこの名がひそかに私には懐かしかったのであった。私の中学生時代はロシアから多くの貴族が日本に逃げこんできてソコロフスキーというピアニストが神戸の映画館のサイレント映画の伴奏者となった。このピアニストがソロが画面を見とれるばかり美しくした。その名と、ソクーロフの名が似ていることが面白かったが、バレリーナのアンナ・パブロワを見た少年時代から今日までディアギレフ、そしてエイゼンシュテイン、私が幼年少年青年のなかにずいぶんとロシアの滋養を食べてきて、そしてこの今もソクーロフを身びいきしてしまうのだが『マリア』の伝説の哀歌のような古めかしい可愛さと地方色の匂い。これと『静かなる一頁』のおかったるい表現主義のモダン・バレエを見ているがごとき監督自身の狂愛。そのどちらにも私は映画の私の愛情を捧げたい。（「アレクサンドル・ソクーロフの宇宙」パンフレットより 1994年刊／ダゲレオ出版）